

美術の窓(72)

神像の眼差し — 顧問と館長の連携

大和文華館館長 水田 徹

前回の〈美のたより〉1999年冬号に、本館の関口正之顧問が寄せられた文章に感動し、ハタと膝を打った。大和文華館蔵「吉野子守明神画像」の中央に描かれた明神の、比較を絶する大きさと清澄な眼差しの内に神の表現が見てとれる、という氏の指摘は誠に当を得たものであろう。と同時に、古代ギリシアの神像表現にも全く同じような現象が認められるような気がしたのである。

ギリシアのパルテノン神殿を飾っていたフリーズ浮彫は、アテネで催された4年に一度の大祭の行列をテーマにしている。市民がさまざまな身纏いで、あるいはさまざまな献納物を手に、アクロポリスの丘に近づく様子を、ほぼ当時

の実景そのままにとらえたもので、その美しくも真摯な物腰と眼差しは、世界美術史上第一級の人物表現に数えられる。

ところでフリーズ東正面の中央では、行列の先頭を待ち構えるかのように、あろうことか12体の神々が臨席している。神々はそれぞれ比較的寛いだ様子で腰掛けているが、その頭の高さは座してお立ち姿の人間と等しく、つまり立てば人間よりはるかに大きな姿に表されている(図3参照)。その寸法の開きは「吉野子守明神像」の場合ほど大きくないが、縦1メートルで横長という画面の制約の中で、これが作者に許された最大の神格表現だったのであろう。

眼差しの表現も確かに違う。眉

間に皺を寄せればかりに険しく水平彼方を見遣るアルテミスの眼差しは(図1)、若者の守護女神としての威厳に溢れ、一方、水瓶を担ぐアテネの青年の視線は(図2)やや伏せ気味ながら視点は定まり、この世の生身の人間の息吹が漂う。アルテミスと青年の視線を微妙にずらすことによって作者が示そうとしたもの、それは吉野子守明神と赤子ないし脇侍の女性の場合と同類、同根のものであろう。

関口顧問によれば、こうした眼差しの表現は日本美術の他の神像にも共通するという。パルテノンの場合も、12体の神々はそれぞれ違った姿勢、異なったポーズを見せつつ、眼差しはどれも直接には人間に向けられず、近づく祭りの行

列には無関心を装う。神には先刻お見通しだが、我々には直には見えぬ存在、それが神であるという概念が、洋の東西を問わず、ここに見事に造形化されているといえよう。

関口顧問には大和文華館の運営に関し折りにふれ助言をいただき、年度の展覧会計画や購入作品の選定など重要事項の決定の際には、直接会議に陪席願ってもいる。と同時に、美術館活動の基盤をなす美術史学あるいは博物館学という学問のあり方、ひいては作品の分析や解釈そのものに関しても、今回の場合が正にそうであったように、ご専門の立場からご指摘いただいている。今後とも顧問と館長が連携し、美術館に課せられた社会的使命を全うしていきたい。

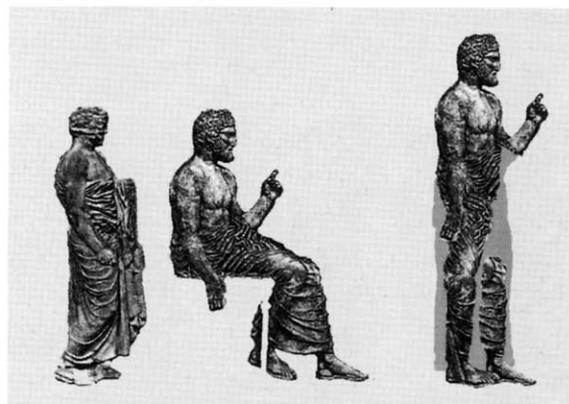
図1. アルテミス女神



図2. 水瓶を担ぐ青年



図3. パルテノン東フリーズより抜粋(左より行列指揮官、海神ポセイドン、同神のコンピュータ処理による立像復元)



季刊 美のたより No.130

平成12年2月17日

発行 大和文華館